
クレヨンしんちゃん 薫風を呼ぶ 人外少年大狂劇

パタ百ハイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クレヨン shinちゃん 薫風を呼ぶ 人外少年大狂劇

【NZコード】

N4124F

【作者名】

パタ百ハイ

【あらすじ】

昨日までは何時も通り始まり何時も通り終わっていた…今日も同じ様にそうなると思っていた…だがそれはある客の来訪により容易く崩壊した…

開幕の朝

埼玉県春日部市

野原家の朝

「こじりしんのすけー何時まで寝てるの?幼稚園バス来ちゃうわよー。」

「今日オラ幼稚園非番だから…」

「今日お仕事お休みなのはパパだけーあんたはひやんとあるのー。」

「うーん…明日一日分行くから今日はお休み…」

「何おバカな事言つてるのーどうせつて一日分幼稚園に行くのよー。」

「じゃ有給休暇使つね…確かに今年はまだ一回も使つてないから…」

「幼稚園児に有給休暇があるかーー!」

「労働者の権利にある筈じや…」

「あんた労働者じやないでしょーがー!」

「みさえ、バスが来たぞ」

「もつー。」

「野原さん」

玄関のドアを開け寝巻き姿のしんのすけと鞄を抱えたみやえがバスに近寄りバスに乗せた

「おはようございますよしなが先生」

「おはようございますよしなが先生…」

「すみません途中で着替えさせていただっこ

「は…は…」

「よしなが先生…何で家に来たの?」
「送迎の為です」

「今日から始めたの?忙しいね教職員つて

「毎日やつてます」

「じゃ宜しくお願ひします」

バスが出発しみさくは見送る

「母ちゃん」

「なーーー?」

「オラがいなーい間に実家に帰らなーでね」

思いつきつけるみやげ

擦りむいた鼻を押さえながら家の中に戻る

出迎えてくれたかのよつこじんのすけの妹、ひまわりが出て来た

「ママ」

「なーーー?」

「ひーーー」

ひまわりを抱き上げる

こんな忙しなくとも穏やかで平凡な日々が何時までも続いてくれる
とこの時思つていた

誰もがそつーー思つていた

来訪者（前書き）

久しぶりです
連載の仕方が漸く解りました
取り敢えずオリキャラ二人登場です
二人共知ってる人は知っているキャラです

来訪者

「上陸したぜえーー！」の春田部市にー！」

駅からけたたましい（とこづか喧しげ）声を言ひは黒い中国服を着た少年に周囲は田を向ける

その少年を一回り小さい少女は顔を赤くして落ち着かせようとする

「やめて崎君さき、恥ずかしい」

「何言つてんだゼノちゃん、今、春田部に到着したこの喜びをこの駅にいる人達に…」

言い終える前にゼノと呼ばれた少女は崎と呼んだ少年の頭に斧を振り下ろした

「伝わるか…てか迷惑だ…」

「悪かったよ…」

斧を抜いて血みどりの顔をナップキンで拭く

「本当だっ！」

「本当本当」

「それなら…」

「さきせこは私崎生破は今…」の春口都市に来訪…」

傷口に番傘を突き刺した

損傷していた箇所に追撃を加えられたせいが、復活が遅い

少女はその少年を乱暴に引き摺つて駅を去つた

アクション幼稚園

しんのすけの周囲には四人の少年少女がいた

風間トオル、桜田ネネ、佐藤マサオ、そしてボーちゃん

何故ボーちゃんだけ一ツクネームなのかと言つとその本名が明らかになつていなか

「ねえ今日何して遊ぼうか？」

「じゃリアルおまま」とを……」

「絶対やだ！」

ネネが発言すると他の四人の少年は声を合わせて反対した
リアルおまま」とはとても幼稚園児がやる遊びとは思えない程凝
つた設定と歪んだ人間関係を描く凄まじいものだからである（脚本
も存在する）

「じゃ、市役所に、行かない？」

「うつ発言したのはボーちゃんである

「何で市役所に？」

「ボ…春日部市役所で今日…フードバトルが…ある…」

「フードバトルって？」

「簡単に言うと大食い競争だね、時間内に多く食べれるかとか…」

「平日だから旅行者くらいしか来ないだろ?」

「オラ達も参加しよう!」

「小学生からだよ参加は」

「オラ達参加資格満たしてるね」

「何処が！」

全員がつっこむ

「何で僕がフードバトル参加せにゃないうの？」

「旅費稼ぎ」

「兄貴から沢山貰つた筈だけど」

「ええ、數千万程ね……だけど電車貰と駅弁の代金で消えたの全額が」

「……金は計画的に……」

「駅弁は殆どおのれが喰つたんですよ……」

来訪者（後書き）

まずは「Jの「ハビ」登場です
Jの「ンビ」がやつて来た理由とは?
J期待出来たらお願い致します!

観光に来た男（前書き）

今回の話で新たに登場するオリキャラは…
あくまで今のところただのキャラクターですので…

観光に来た男

春日部市役所

「参加をしたい方は受付を済ませて控え室に入室して下さい」

「ゼノちゃん、参加しないの？」

「君がするの」

「どうしても？」

「スッカラカンになつたのは誰のせいだ」

「ゼノちゃんが旅費猫ばばして株に投資したから？」

「おのれが考えなしに飯を本能のままに喰うからじやあ…」

プラスドライバーで顔全体を何度も突き刺した

「いやああまり観客おりませんなあ

しんのすけが呑氣そつに言つ

「当たり前だよ、平日だもん」

「でもやつぱり観客はいて欲しいぞ、他の客を殴り倒すとか発煙筒を投げつけるとか…」

「しんのすけ… それフーリガンだぞ…」

「風間君… フーリガンって… これ?」

風鈴をくわえた雁の絵を見せる

「それ… 風鈴と雁…」

「じゃ魚を食べる動物園とかで見掛ける…」

「それ… ペリカン」

「アメリカの奴隸解放した大統領?」

「それ… リンカーン」

「だつたら…」

どこから持つてきた携帯で調べている

「もついい！キリがない！」

五人の後ろから、高校生程の男が現れた

「うわ！」

「あんた誰？」

「人に名前を聞く時は自分から名乗るのが礼儀ではないのか野原しんのすけ君！」

「何でオラの名前知ってるの？まさかオラのストーカー？』めんね、オラ男に興味無いの！」

「僕だつてありません思い上がりんで下さい脳内常春野郎、君は、いや君の家族は春日部市の名譽市民ではないか！知つていて当然…」

「で？」

「はい？」

「あんた誰？」

「申し遅れました私生まれも育ちも田南市、現在観光で来ておりますパタ百ハイと申します！」

「何日酒の？」

「氣になるの？」

「」なんおかしい人がオラと同じ地面の上に立ちたくないかい

「何様じゅうじんかくしょう」

「オラがこんかくしょうならお前は文部省だー」

「せめて文部科学省にしてくつやー！ て何で文部省になるんだよ兄弟
ー！」

しんのすけを軽くひつぱたいた

トオルが恐る恐る口を挟む

「あの… お楽しみの最中申し訳ありませんが」

「ん？」

「モナカが申し訳無いなら雪見大福はー」めんなさいか？」

「アイスの話はしません、それより始まつちやいますよ」

「やつだつた」ひつぱり忘れてた

「すっかりだるー。」

「アーモニカ」

春日部防衛隊 + は会場に向かった

「？せめて（シータ）にしてくれよー。」

「誰に文句を言つてゐんのですか？」

トオルが遠い目でパタ百ハイを見て冷ややかに突っ込んだ

観光に来た男（後書き）

どうでした？

自分登場させました

次くらいに話進めたいと思いますので宜しくお願いします

新たな（一時的）居住者（前書き）

何か今回は展開が急ですが鬼も角会えました
果たしてどうなるでしょう？

新たな（一時的）居住者

会場

参加者は10人ばかり

観客は7人のみ

「観客少ないね」

「平日だからね」

「賞品何？」

「三万円らしい」

「三万円つてどんくらい？父ちゃんの月給と同額？」

「…安月給の極致ですね…まあ勘で言つていいんでしょうが…」

六人の隣に座つていた少女が口挟む

「君はなんで？」

「旅費が全てあのアホの腹の中に入つたのでお金を僅かにでも稼ご

「つと思いまして…」

「大変だね…」

「始まるわよ」

まず最初は五十枚の草加煎餅をどれだけ早く食べられるか

次に制限時間三十分以内にどれだけ多く食べられるかを競う

総合で一番優秀な参加者が賞品を贈呈

一回戦開始

「(ゴ)馳走様でした」

ゴングの鐘が鳴り終えたと同時に崎は皿を置いた

皿には屑一つ落ちていなかつた

「早い…」

「何時煎餅に手をのばしたかすら解らなかつた…」

「えりやつへ？」

「凄い…」

一回戦

三十秒経過

「終」…

「三十分じゃないの？」

「あなたが全て食べ尽くしたからです」

呆然としている観客六人との参加者

何はどうあれ崎は無事三万円分のチョコバーを貰つた

「えりやつへ、お菓子貰つやつたよ…」

「しゃーない、貯金トろしてホテルの宿泊代…」

「ねえねえお兄さん」

「ん？」

「凄いね」

「ども、早食いは得意分野な方で」

「泊まる所無いならウチに泊まらない？」

「え？ いいの？」

「大丈夫大丈夫、オラが事実上大黒柱だから」

「嘘つくな」

その場にいた全員が同時に突っ込んだ

野原家

台所にしんのすけ、崎、ゼノ、パタ百ハイが座っていた

「何でアンタまでいるの？」

「いや、泊まる所なくて」

「何時帰つてくるの？」

「父ちゃんは7時頃、母ちゃんは午前中から保護者との集まりに行つてから六時半くらい」

「保護者との集まりで六時半まで？おかしくない？」

「パタ百ハイせん…ウチの母ちゃんはね、長無駄話が好きなの、だから一対一の井戸端会議でも三時間はゆうに話すの、そしてデパートでの試食も考えると…帰つてくるのはそんくらいになるんだぞ！」

しんのすけは力強く言い切つた

「こじても腹減つた」

「育ち盛りだもんね

「巣立ちには酸橘が一番だもんね」

「古いー。」

フォークで喉を突き刺した

崎は自力で引き抜きアロン・アルファで傷口を塗つた

「よし治つた」

「治つてねーよ絶対確実に！傷口接着剤でくっつけただけだもん！
絆創膏を貼つてすらないもん！」

「よつ！ りせ！」

ゼノが椅子から立ち上がり冷蔵庫の扉に指をかけた

「何か作りますね」

「え？ ゼノちゃん料理出来るの？」

「うん、 しかもかなり上手いよ」

「じゃいいや、 冷蔵庫気をつかうね」

扉を開いた瞬間に左に移動していく

ゼノは開けた瞬間に左に移動していく

「どれだけ詰め込んでいたんだ？」

「リクエストあります？ 材料あつたらそれ作りますよ、 リクエスト
の内の一品だけですが」

「じゃオラカレー」

「僕は中華丼」

「また？」

思いつきり怪訝な顔付きたなつた

「不満？」

「出掛けの前日まで一ヶ月も三食中華丼のみで不満にならない奴はおらんだろ？」

「うーん」

「生物の例外は黙つてろー・兎も角却下ー」

「卵料理以外なら」

「承知しました」

晩御飯はカレーとなり、野菜を刻む音が聞こえ始めた

脱線（前書き）

間空いてすみません
今日はひろしさんが少し危ない目に遭います

「ただ今、あらいい匂い」

この家の主婦、みさえがひまわりをおぶつて玄関のドアを開け靴を脱いだ

ひまわりも匂いを嗅いで目が覚めたようだ

「たや？」

「ひま…カレーの匂いがしない？」

「お兄ちゃんが作っているんじゃない？」

「私より美味しそう…てあんた今喋らなかつた？」

「何言つてゐるじやない」

「言つてゐるじやない」

指を口にくわえた

「ばぶ？」

「今更喋れないフリをするな！それよりしんのすけに晩御飯作つて
…」

台所に向かうとしんのすけが見知らぬ一人の少年と一人の少女と一緒にカレーを食べていた

「やつぱゼノちゃん料理上手いな」

「今からでも家政婦として働けるんじゃないの？」

「そんなオーバーな…」

「いや、オラの母ちゃんより上だぞ」

「ただ今」

「お、みさえ！お帰り！」

「母ちゃんって呼びなさい、ところでその人達は？」

「よくぞ訊いてくれました！私パタ百ハイ…」

「何か五月蠅い」

ひまわりが辛辣なようで的確なコメントを放つた

「ＳＨＯＣＫを受けたぜ……同級生達だけでなく乳飲み子からも同じ『メント』が来るとは……」

「乳飲み子が蝶つたといつ驚愕な事実はスルーですか？」

「やう思ひなゼノちゃん、世の中既存の常識では計り知れない事が
いっぱいあるんだからー！」

「そりゃやうだけど……私達が春日部に来た理由と関係しているん
じや……」

「春日部に来た理由？あなた達何の目的で……」

「すみませんが今は話すつもつはあつません」

「僕の目的は……」

「黙つてくれません？あなたが会話に参加すると話がややこしく
なる……」

「それでね母ちゃん、この人達を暫く家に泊めてやつていい？」

「お願ひします、私達にはお金が無いんです」

「でも……」

「私も崎君も一通りの家事は出来ます」

「だけどパパが何て言つたか…」

「お願いします。美人で優しくおしとやかなお姉さん」

「説得してみるわ」

(早つー)

全員がそう思つた

「でも…」

「何ひまわりちゃん」

「え？ お兄ちゃんあたちの名前教えた？」

「つりん」

「ゼノちゃんは大抵の人間は初見だけで名前だけは分かるんだよ」

「凄いね」

「よくあんなお世辞つくれるね」

「お世辞に弱いタイプの人と思つてね」

「どうひで田那さんは？」

「家に近づく前に乗り遅れたから一つ後の電車に乗つて帰るつてメールが届いたけど…」

満員電車に乗つてゐるひろし

彼の表情は少しだけ嬉しそうだった

理由は久しぶりに十日間の纏まつた休暇が入つたからだ

そしてその休暇は明日からである

「いやあ…明日から楽しみだなあ…何しようかな…ピクニック行こうかな…」

そんなひろしが乗つてゐる最後尾の車両を妙な円盤に乗つていた男が眺めていた

全体的に突つ立つてゐる藍色の長髪とは対照に、田元の髪は下ろしている

服装はユウガオの刺繡が入つた灰色のYシャツに赤いジーンズ

そんな男が指を鳴らすと空から何本かのレーザーが照射され

そのレーザーは連結を外し車輪を一つに切断

車両は当然脱線した

幸い周囲は何も植えられていない畑で人はいない

そして最後尾の為被害は少ない事…

脱線した最後尾の車両からは我先にと大なり小なり怪我をした人達
が出始めた

「おー出て来る出て来る…さて…遊びで来たから早めに帰らないと
いけないんだけど目撃者出すのも駄目なんだよなあ」

言葉とは裏腹に全く嬉しそうに呟いた

脱線（後書き）

ひまわりが何故か喋れるようになった
そして謎の男の襲撃…
ひろしさんは無事に帰れるのでしょうか？

祖父登場（前書き）

大晦日になつてまた更新しました

「ただ今」

「おっ父ちゃんおかーにマキトカゲ」

「パパお帰りんごは冬の果物」

「しんのすけ、ひま、ただ今…あれ?ひまわり、お前今喋らなか
つたか?」

「気のせい」

「思いつ切り喋つてんじやねえか!」

「遅かつたわね…どうしたの?」

「いや…電車が脱線をして軽傷で済んだ人達が変な乗り物に乗
つた男に襲い掛かつて…」

ひろじの言葉に崎とゼノは反応する

「その男はどうなつましたか?」

「…から先は覚えていない…何時の間にか家の前にいたんだ…」

「夢でも見たんじゃないの？」

「夢じゃねーよ。」

「巻き込まれたのなら…隠す必要は何もあつませんね…」

「君達は？」

「オラの新しい友達、この子がゼノちゃんで、いつまでは崎生破さん、
んでこいつちは…」

「よくぞ聞いてくれました！自分パタ百ハイ、ここに来た目的は…」

「無視していいぞ」

「やつやる」

「何でこいつたあ！肩が凝つたあ！」

「アイツがどんな奴なのか知つているのか？」

「説明の前に言つておきます。今から言つ事は他の人に言わないで
下さい、そして…普通ではとても信じられない内容です…それ
を頭に入れた上で聞いて下せ…」

「分かった」

「分かったわ」

「分かつたぞ」

「うん」

「承知しました」

脱線した車両に腰掛けているのは男

コートを羽織り、白髪で田元が髪で隠れている

周囲には死んでいる男

襲つた謎の男も顔面がグチャグチャになつて原型を留めていない

間違ひ無く死んでいる

コートを羽織つた男はバイブ音の鳴つた携帯電話を取り出す

「もしもし…君か、ああ始末しといた」

『悪いな』

「気にするな…そのくらいは別にいい…仕事だし…これからも次々と生破の味方の道士が来る…それまで生破がカバー出来ない分をする…」

『君も自分の弟子の世話とか仕事多いのに大変だね…』

「じゃあ君がしろ」

『却下』

「あつそ…」

『僕は蓬莱山とは縁を切つていいし』

「じゃあな…さて…後処理は警察で充分だし…一旦帰る

「嘘でしょ？」

「本当ですー！」

「大人をからかうのもいい加減にしてよ、そんなの有り得る訳ない
じゃない！」

「で…俺達はどうしたらいい？」

「あなたそんな荒唐無稽な話信じるの？」

「実際襲われたんだ…信じるしか無いだろ？」

「オラも信じるやー。」

「有難うござります……何時も通り生活して下さい。奴等は余程の事がない限りは一般人に手は出さない……今回のようなケースは稀です」

「分かった……」

電話が鳴った

「誰だよこんな時に……もしもし」

『おうひろしか

「親父……」

電話をかけてきたのはひろしの実父にしてしんのすけの祖父、野原銀之介だった

「何の用だよ」

『畠仕事も大分終えたしたまにはお前達の顔も見たいしの、今から遊びに来るよ』

「いいけど……」

「ほんじゅ 今晚は」

玄関のドアを開け、銀之介が現れた
しんのすけが銀之介に抱き付く

「じこちやーん」

「しんのすけー」

「会じたかつたあ

「止めんか氣色悪いー。」

「おじこちやん」なんばんは

「ひまわっちやんも元氣やじやな、相あわらすめんこいのう」

「乳飲み子が喋ったのスルー?..」

幼稚園へ…途中に（前書き）

三週間以上開けて久しぶりの更新です
出来たらお楽しみを

翌朝

といつても時間的にかなり早い

朝日が昇り始め、僅かに明るいだけだ

何時も通りみさえはしんのすけを起こす

しんのすけは銀之介と抱き合つて寝ていた

「恋人同士か…」

「仲良しですね」

「仲がいいのは結構なんだけどね、しんのすけやひまわりに悪影響を与えないで欲しいのよね…」

話し掛けてきたゼノの言つた事に溜息混じりに小言をいつ

しんのすけは銀之介の事が大好きだし、銀之介もしんのすけを可愛がっている

だが銀之介はしんのすけに輪をかけたような性格の持ち主で、家に来る時は主に自分が迷惑を被っている

幼稚園に行つた時は苦情を貰つた事もある

みさえもそんな銀之介が嫌いではないが自重して欲しいといつ思い
はあった

「何でゼノちゃんが起きているの?」

「いえ、崎君ちでは主に家事をしてましたから早い時間帯に起きれる
のがクセになつて……」

現在崎家には崎とその兄、ゼノの三人が暮らしている

お兄さんは家事全般上手だが相当の学者バカで研究や論文制作にな
ると終えるまで何日も閉じこもるらしく

崎の方も家事全般は人並み程度には出来るがあまりしない

自分が散らかした「ヨミ」を「ヨミ」箱に分別して捨てる程度だ

なので必然的にゼノが崎家の家事を普段やつてこる

「ほへー……何歳からやつてるの家事……」

「崎家に居候を始めたのは三歳の中盤頃からだつたから……その時か
らです、最初は失敗を繰り返してましたが」

「凄」

取り敢えず野原家在住者を全て起こし朝飯となつた

しんのすけもひろしも余裕を持って幼稚園や会社に行く準備が出来た

バスが来る時間帯

幼稚園バスが停まつた

「**ଓଡ଼ିଆରେ କଥା**」

「お叶(は)」や「こまかよしお」が先生

「よひよしなが先生」

珍しいですね、しかしながら時間に間に合わなくて……」

まね、じや、出発お新香！母ちゃん行つてらっしゃい

「行つてきまへでしょ？」

しんのすけの後に、銀之介、崎、パタ百ハイも乗り込んだ

バスのドアは閉じ、発進した

「珍しいなしんのすけ」

「何があつたの？」

「それはそれは、私パタ百ハイの……」

「あんたに……聞いてない……」

ボーちゃんはパタ百ハイを一蹴する

「みんな失礼だな……オラだつてたまには早起きをすんな」

「しんちゃん、幼稚園バッグは？」

「忘れちやつたみたいだね」

「何で崎さんも乗つてるんですか？」

「IJKにバスがあるからさ」

「よーし、幼稚園につくまでカラオケ大会始めるべー。」

「ほつほほーい！」

その時、幼稚園バスの前でフードを被つた男が飛び出した

野原家のガラス窓の隙間から小さい影が飛び出した

足をボトルキャップで固定されている為飛び跳ねるしか移動出来ない

地面に着地した時、シロとゼノに見下ろされた

「しまった！見つかっちゃったキャラル」

「君…何者？」

幼稚園へ…途中に（後書き）

シロとゼノが出会った人物は…？
バレてますよね（笑）
では続きを宜しければ楽しみにして下さい

防護スーツを纏つた男（前書き）

2ヶ月以上放置してすみませんでした

防護スーツを纏つた男

「あなた…人間？」

「に見えますキヤル？」

「見えません、尋ねただけです。あなたがしんのすけ君達と一緒に食玩に夢中になりファイギュア化した親達を助ける為、食玩のオマケの菓子にされていたお菓子の怨みを晴らす為にしんのすけ君に“変身お菓子”を与えた事やその後普通のファイギュアに戻つたけど異変により活動再開した事は解りました」

「え？ 私説明した？」

「してませんしされてません、私少しだけ理解が早いんです、 同年代よりちょっとだけね…」

「少しじゃないよ、思いつ切り超越してるよ」

シロが溜息をつきながら台詞を吐いた

幼稚園バスの前に現れたフードの男は

バスに轢かれた（当然）

フードが捲れ、顔が露出した

その顔は崎の顔だった

いや、酷似してはいるがよく見たら少し違うし雰囲気が違う

崎は呆れながらバスを降り、春日部防衛隊もついて行くように降りた

「痛たたたた…」

「何してんの？兄貴」

「」の人が兄さん？

「うん…でもそれを尋ねる前に…」

顔を乱暴に掴み、皮を剥いだ

機械の中身だった

もう一度剥ぐと、先程と同じ顔

更にもう一度剥ぐ

顔の皮を剥ぐ動作を繰り返すと、頭部その物が無くなつた

その時、崎の兄の腹部が割れ、中から汚れた白衣を着た崎の兄が顔を見せ、脱ぎ捨てた

「もつ一度訊くけど…アンタ何してんの？」

「新開発した防護スーツの実験…顔はお遊びで少し手を加えてみた」

「実験結果は？」

「失敗…バスに轢かれた時の痛みやダメージは全然無いけど転んだ時突き指しちゃってた…」

「材料何？」

「」飯、鶏肉、卵、三つ葉…味醂、醤油…そして…」

「親子丼の…材料…だよね？」

「そんなもんどうやつてこんなスーツ造れるのよー。」

「すみません…崎さんの…お兄さん…」

「爆仙^{ばくせん}、崎爆仙16歳、専攻は工学、宝具開発及び研究を主にやつとつます」

「ほつほつ、ほつがくつて事は爆仙さんは契約金は高いのか」

「いや、その高額違つ」

「で…兄貴は何しに来たの？防護スーツの実験なら兄貴の研究室で十分出来るよね？」

「君と同じ理由…正確には…君の手助け…」

「戦闘能力ゼロのアンタが手助け？」

「キツいな…戦闘には参加しない…僕の友人がやつてくれる…」

「それでは出発しますよ、宜しければ爆仙さんも」一緒に宜しいですよ？」

「はいそれでは遠慮無く…」

「遠慮しないのね…」

「その友人さん達はどんな人？美人のおねいさんいる？」

実際にしんのすけらしい質問だ

その質問に爆仙は親切に応える

「いるよ、歳の割に胸は小さいけど活発で可愛い人と不愛想で無口だけど綺麗な人が」

「じゃ幼稚園にレッソラゴー！」

バスに乗り込み、新たに一人加わりアクション幼稚園に出発した

子供は遊びが学びです（前書き）

超久しぶりに更新します

子供は遊びが学びです

勝手について来た面々の内で園児達と初対面の崎とパタ百ハイと爆仙は園児達とすぐに仲良くなつた

崎はあつという間に園児達に懐かれ、引つ張りだこであつた

爆仙は部屋で数人の園児達に持ってきた玩具で遊びを教授していた

お手玉を教えた後、
廻の作り方を教えている

「す、」——い、爆仙お兄ちやん器用だね」

「嫌々こんなのは誰でも出来るって、そうだ、凧を飛ばす時は電線に注意してね」

「はい」

銀之介は腹に顔を描き

「みんな前回見損ねたわしのお髭見たーい?」

「見たい見たーい」

囲っている園児達が声を揃えて言った

「止めて下下さい！」

慌ててよしなが先生がストップをかける

因みにパタ百ハイは…

「あー…いいお茶だ」

職員室に勝手に入り込み、留守をいい事にお茶を淹れ、茶菓子を食べて和んでいた

彼等の周りに春田部防衛隊はいない

何故なら彼等はリアルおままじとを強制的にやらせていた

内容は……文章で表現するには作者では力不足の為、想像にお任せする

それらの様子をどのグループにも混じらず遠巻きに見てている園児がいた

短いボニー・テールの黒髪に団子眼をした少女

彼女はしんのすけ達と同じひまわり組に所属している

名は辻野希
ひじののぞみ

今年の夏からの転入生で、他の園児達とあまり仲良くしようとせず、一人でいる事が多い

因みに両親は共働きで忙しいのか、参観日等に来た事は無い
何故か送迎バスではなく、保護者の送り迎えで通園していた

その保護者が教員や園児、保護者の前に姿を現した事は一度もない

「おーい希ちゃん」

「野原君、何?」

希にしんのすけは声をかけた

「リアルおまめ」との役交代して

「役は?」

「会社が潰れて妻子に逃げられ親戚宅に居候している今年五十の中年、大好物は鰯の塩辛」

「やだ、最後の設定の意味が分からない」

当然だ

「御願いします」

土下座をした

「靴も嘗めるから」

「止めて靴が汚れる」

「ちよっとしたちやん、私とのおまめいじがそんなに嫌なの?」

「うん」

「分かった、但し条件がある、それを呑んでくれたら代役を務める」

「何?」

田を輝かせ彼女に顔を近付ける

「教えてくれない?」

「オラの身体の黒子の数を?」

「そんなの知りたくない」

「母ちゃんの体脂肪率?」

「知つて何か自分に得するの?」

「オラとなな」おねいさんとの関係?いやー困るな希ひちゃんは、オラとななこおねいさんは…」

興奮して言つてこる事がよく分からぬ

希は取り敢えずしんのすけにキャメルクラッチをかます事にした

「ギブギブ!」

「真面目に聞いて、聞かないと関節全部外すからね」

「ほー……」

しんのすけの拘束を外す

「で何?」

「うん……」

休み時間終了の予鈴が鳴つた

急いで園児達は教室に入る

ひまわり組の教室に入る際に希はしんのすけにこう啖いた

「明日君の家族や春日部防衛隊がした冒険の話聞かせてくれない?
戦国時代でもパラレルワールドでも何でもいいよ」

啖いた時の顔は、普段の彼女からは想像がつかないくらい輝いた笑
顔だった

謎の勢力（前書き）

今回は少し長めです

「何の事言つているの？」

「冗談がキツいなあ、君達家族と君の友達はかなり有名人だよ？他にもブリーブリ王国で願い事で魔人に小宮悦子のサインを頼んだのも知つてるよ？ヘンダーランドでトランプを使ってオカマ魔女とババ抜きをしたのも知つてるよ？臨海副都心で魔人の封印を解いたのも知つてるよ？更に……封印場所に行く時つばき……だつけ？その人にプロポーズ同然の告白したんだよね？やるねー」

「何で……」

「プリリンに騙されてマタつて娘を封印してしまったって……駄目じゃない、敵の言つ事鵜呑みにして仲間を悪者として見るなんてさ、まあ和解できて何よりだけだ」

「……今はお勉強の時間です！お喋りは休み時間にしなさい！」

「ほーい」

「また後でね、今度はあの愉快なお兄さん達の事も聞きたいな」

放課後

今日は短縮で午前で終わりの為園児達は帰りの会が終えるとすぐに送迎バスに乗り込む

希はその後もしんのすけに話し掛けようとするが、しんのすけが休み時間は春日部防衛隊や他の友人と積極的に話し掛ける事で話し掛けられる隙を作らなかつたので出来なかつた

その希は何時も通り送迎バスに乘らず、個別で帰宅している

野原家

「ただい魔女狩り」

「お帰リンカーンは奴隸解放をした大統領」

「しんちゃんお帰りキヤルル」

「ただ今川焼きは白餡が……のわわあ！」

みさえの肩にしがみついているボトルキャップの猫耳のフイギュア

「いや、しんのすけは田を丸ぐくる

「うーん、うーんして会話するのは久し振りねしんちゃん

「おーおーおーでも何でキャルトちゃんがまた活動しているの?..」

「それはゼノちゃんが簡単に話してくれたよ……同時にゼノちゃん達が来た理由はひまわりちゃんが喋れたりキャルトちゃんがまた動けたりしたのと同じ理由だよ」

十歳前後の白い天然パーマをした少年がキッチンから出て來た

「あんた誰?」

「シロだよ、しんちゃんが拾つてきたしんちゃんの友達の」

「嘘?」

信じられないのは無理は無いだろう

今までシロは何度か言葉を発した事があるが、人間の姿になつた事は無い

確かに声はシロだったが、そんなの証拠にならない

だがそれはシロも予想していた

いきなりそう言われたら、自分がしんのすけの立場でも信じなかつただろ？

「だよね……じゃあこれなら信じてくれる？」

シロは元の犬の姿に戻つた

「おーシロー！ごめんね友達を疑つたりして」

「いいよ、じうじて信じてくれたんだし」

「で、しんのすけ、生破君達は何処？」

「え？」

しんのすけは記憶を探つてみる

帰りの会は……いた

送迎バスにも一緒に乗つてみんなで大いにハシャいだ

バスが家に着いて降りたのは……自分一人だけであった

「みんなバスの中だ……」

「え？ 困るよ、僕達がいつなつた理由をつかんと訊きたいの……」

「ゼノひちかんは？」

「ひまわりの面倒を見ていて『本を読んであげていたら一緒に寝て……』

最も口頭の疲れもあり、先に寝たのはゼノであった

一方、送迎バスでは

「では二番一、『白い冬』を歌います！」

「いいぞいいぞー！」

「……いい加減降りてトドセー……」

バスの中は最早宴会場と化していた

よしなが先生が疲れた表情で崎達に注意する

場所は変わり、春日部に最近オープンした漫画喫茶

その店長室に繋がる地下の四十畳程はある広い部屋

部屋の中央に安置されているソファーに辻野希が座ってティーポットの中の紅茶をティーカップに淹れ、啜っていた

テーブルとソファーの周りには十数人の男女があり、向かい合ひ形で安置されているソファーには中学生程の少年が足を組み、テーブルの上に重ねてある『こち亀』を読みながら後ろに立たせているメイド姿の幼女に番茶をワイングラスに注がせて飲んでいる

少年の横には小さな人影がちょこんと座っている

「つまり辻野、お前は崎生破が野原しんのすけの家に住んでいる
……そう言いたいんだな？」

「はい、と言つてもこれは彼等から直接聞いたのではなく、春日部防衛隊の面々から聞き出した情報に過ぎませんが……」

「それでもいいよ、そもそも崎生破がお前に入らせた幼稚園の関係者に接触したという事自体嬉しい誤算なんだからさ」

「野原しんのすけに関する噂の詳細を聞き出す事は出来ませんでした……それどころか失態を犯してしまい、警戒され、聞き出すのは容易では無くなり……」

「あー構わないよ」

「如何為さるのでしょうか?」

傍らにいた執事服を着た青年が尋ねる

「春日部防衛隊と野原一家を纏めてここに連れてこい、なるだけ無傷でだが抵抗したら腕つ節も使っていい、但し気絶までだ、それと事はテカくするな、可能な限り穩便に事を済ませろ」「

「ねーねー」

小さな人影は少年の袖をくいくいと可愛らしき力で何度も引っ張った

「何だ?」

「いいの? あんな指示出して」

「いいのいいの、「イツ等は破天荒だが節度は弁えているし俺の命令には比較的忠実だしな」

「破天荒……ね……君が言つかよ

「それもそうだな、元々勢力拡大の為に異変を利用しようとして春日部に来たが……投げつける一石で鳥が五羽も六羽も採れそうだ……」

…」

「何時実行致しようか？日にちを決めて計画を立てなければなりません、行き当たりばったりでは失敗するだけでなく足が着く可能性も跳ね上がります……」

「あー……そうだな、避けたいが実力行使する可能性も入れとかんと……まあ辻野、お前に全部任せる、絶対連れてこい」

「承知いたしました、魚塚士朗様」
（うおづか じろうさま）

夜の話（前書き）

超久々です
なので今までの話と今回の話にズレがあつたとしても…
許してくれたらなーなんて…

「春日部が何等かの災厄に巻き込まれる?」

「うん、そう」

帰宅した崎に春日部に訪れた理由を尋ねるしんのすけ、みさえ、ひろじ、シロ（人間態）、キヤルト

この場にいなひまわりとゼノ、パタ百ハイ、銀之介は布団の中で眠っている

爆仙は無関係者を巻き込みたくないの一点張りであったが、しんのすけの

『家族や友達がそれに巻き込まれた時点でオラは充分関係なくなんか無いゾ!』

の一言でみさえとひろじも詰問し、他言無用という約束の元、説明する事にした

「まず……何処から答えていくべきか……」

「はい」

みさえが挙手する

「何ですか？」

「異変が起きるって言つたけど何が起つるの？」

「知りませんよんなもん」

あっけらかんと答える爆仙

「ちよつとふざかしてゐるのー」

「落ち着いて下さいよ、僕達に伝えられた事はあくまで異変の事前防止、出来なければ拡大の防止、そもそもつてその異変を起こしている原因を突き止める事、何が起つるかなんて本当に知らないんですよ」

「待つてくれ、異変を起こしていくって事は何か超自然的な何かが関わっているのか？」

ひろしが慌てたよつに訊ねる。彼等親子は常識では考えられないような事件にしょっちゅう巻き込まれているのもあって、その手の理解は早かった

「はい、関わつてますよ。それが何かは知りませんけど」

「待つてよ爆仙さん、知らない知らないってばつかで应えに……」

「知らないから知らないと答えた。僕は知つたがぶりはしない、特にこんな事を話す上では……信じる信じないは別ですがね……」

『じつひつけつへ』

『多分、全部本当だと思つ』

小声で話すみやえとひろし

次にしんのすけが手を擧げる

「はい何ですか?」

「さつきから知らない知らないって……それなら他の人に話しても……」

「信じてくれると思つへ…」

しんのすけは考え込む

近々何かが起こり、それが良くない事と分かつていても、何の根拠もなく、どんな事が起こるか分からぬのにそれを言い触らしたら

どうなるか

答えは簡単だ、信じる信じない以前に相手にされない人を信じさせようと思うのならば、理論的な説明やそれが起こるという確固たる証拠、または前例が必要だ。判明していない事尽くしの今の状況でどう他人に理解、納得をさせようというのだ

「だろ？だから誰にも知られず秘密裏に解決する必要があるんだよ

他に質問は？と訊く。誰一人手を挙げない

夜も遅いので、早々と寝る事にした

因みに崎生破は話が始まる前に既に目を開けながら眠っていた

その夜、風間家、桜田家、佐藤家の子供達が何者かに泣きわたした事を野原一家が知る事となるのは、夜が明けてからだった

夜の話（後書き）

何か妙な展開になつてきたよくなつてないよくなつた…

ゼノ「かなり物騒な展開なのは確かね」

何時も通つでない十禮の朝（前書き）

いつは約一ヶ月ぶりです……

何時も通りでない土曜の朝

朝日が差し込んだ……そのお陰で、少しだけ目が覚めた……そろそろ幼稚園バスが来る時間かな？

早く起きないとまた遅刻しちゃう

だけど眠いし、まあいいや

と話を終わらせ、再度熟睡する

「おこしんのすけ！」

ひろしが、今までにない表情で駆け込んできた

「おこしんのすけ、どうしたの父ちゃん、仕事行かなくていいの？」

「今日は土曜日だーそれより来い！大変だ！」

ひろしがしんのすけを無理矢理布団から引っ張り出すと、大急ぎでテレビのある部屋まで駆け込んだ。既に部屋には全員がいた

「もう……何なの?せっかくの土曜日なのにみんなしてテレビにかじりついて……」

「見れば分かるわよ!」

「おわつ!」

みさえは自分の前にしんのすけを座らせる

しんのすけは、ニュースで流れている内容を聞いて、一気に目が覚めた。理由が分かったからだ

しんのすけの友人である風間トオル、桜田ネネ、佐藤マサオが全員ほぼ同じ時間帯に『誘拐』されたというのだ

そして、誘拐の『目的』もその『手段』も謎のままと

まず、佐藤家の場合、『どうもなっていない』のだとこいつ

家の中にいるのを攫つたのは判明しているが、鍵を無理矢理こじ開けたりした跡が無いらしい

次に、桜田家の場合、玄関の鍵は開けられてはいたが、『自然過ぎる』らしい。まるで、合鍵で開けたかのように

風間家の場合が、一番謎だった。何故なら、風間家のある部屋の玄

関のドアのある壁が、『粉々に破壊されている』からだ

人間の力でこんな事が出来る訳がない、爆薬の類の跡も見付からない

警察はこの三件の誘拐を同一のグループの犯行と見て捜査をしているといふ

崎はテレビを切つた。その表情は、野原一家の知つてゐる温和で人懐っこく、能天気な笑顔ではない。真剣そのものだ

「風間君達を……」

何處か重い空気のまま、崎はその表情を崩さず、喋り出した

「風間君達を攫つたのは、十中八九『能力者』の集団の仕業だ」

「『能力者』の……」

「集団?」

「たややい?」

「何でそんなのが……」

「春日部に今起こつてゐる異変とは一体何なのか……それは分からぬ。だけど、それを狙つて春日部に來ている能力者もいるみたい

なんだ……『めん、それを言つべきだった

自分を責めている感じで喋る崎に、ひろしが肩に手を置いた

「氣にするな、君達は何もしていない

「やうよ。悪いのは誘拐した奴等よ」

「それで落ち込むより、それでどうしたらいいのかを考えた方がええ」

「おおっじこちやん言こますな

崎もゼノも爆仙も、野原一家と野原家の住人達の優しさと温かさに、少しだけ気が楽になつた

「『』苦労、よく野原しんのすけの親友三人を攫つてきてくれた

「それで……お次は如何致しましょう?」

執事服を着た穏和そうな青年が、自分達の主である緑髪のマントを羽織った少年に訊く

「三人が無事つて証拠に写真撮つて手紙を同封して送つとけ」

「しかし陛下、それでは警察も來るのでは無いのでしょうか?……」

メイド服を着た少女が、ワイングラスにファンタグレープを注ぎながら言つ

その当然と言える不安を、少年・魚塚士朗は鼻で笑う

「その心配はハナから不要だぜリシアンシス……辻野が言つてただろ?『崎生破が野原家に泊まつてゐる』つて、警察呼んでも返り討ちになるつて分かつてる奴がいるつて事だ」

「ハア……」

「まあその意味でも『能力者の仕業と敢えて分かるような手段で攫う事』を考案した辻野には改めて讃めてやらないとな

「それで、風間トオル、桜田ネネ、佐藤マサオのお三方は……」

「此方の事情に一方的に巻き込んだんだ。解放以外で可能な事なら

出来るだけその御要望を叶えてやれ」

「承知致しました」

「他は今ここにいない奴等を呼んどけ……明日にでも来るかも知れ
ないからな……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4124f/>

クレヨンしんちゃん 薫風を呼ぶ 人外少年大狂劇

2010年10月8日23時54分発行